

B-3. 「こうやると おもしろそう！」

宇都宮大学教育学部附属幼稚園（栃木県宇都宮市） <4歳児>

この事例を取り上げるにあたって

「気付き」や「新発見」が遊びのスタートとなり、「試し」によって、遊びは更におもしろく展開していくわけだが、最初の頃は、「試し」が自分だけのものとして終わってしまうことも多い。自分だけは繰り返し楽しんでいるが、なかなか周囲にその楽しさや発見が伝わらない。しかし、4歳児のこの時期、失敗による「新発見」が遊びを転換していく大きな要因となっている。友達のしていることの中からも、多くの「気付き」があり、それを自分の遊びとして広げるきっかけとしている。

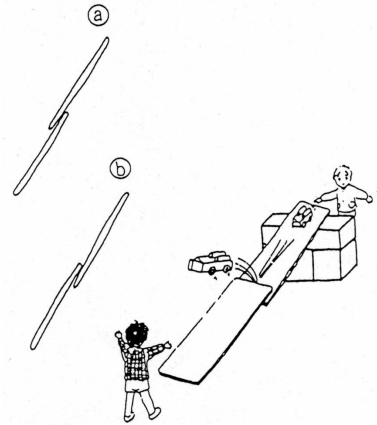
この時期、毎日のように飽きずに続く、ミニ四駆のコース作りの場面から、遊びの転換のきっかけやイメージの持ち方、イメージの広がり方など科学する心を支える環境の要因について考えた。

事例 ①

◎偶然の出来事から発想を広げて

M男は積み木の坂を長くつないで坂道を作ろうとする。板の重ねあわせ方によっては車の走り方が異なる。一段目は偶然(a)のように板をつないだので車はスムーズに走るが、二段目は(b)のようにつないだので、車はつなぎ目で横にジャンプする。ジャンプしたことがきっかけで、「車がどうジャンプするか」が友達の中での関心事となる。

H男は、車のジャンプの仕方を予想して、車が落ちたところからコースを作り足そうとしている。車のスピードや向きによって、ジャンプした後の落ちる位置が異なるのである。何台もの動きをよく観察することによって、落ちる位置の予想がだんだんあたるようになる。



考察 ①

車が落ちてしまったことを失敗と捉えるのではなく、驚きや発見をもって捉えることのできるM男の感性はすばらしい。その感動の体験が探究心など科学する心に向かうエネルギーとなっていることを感じる。

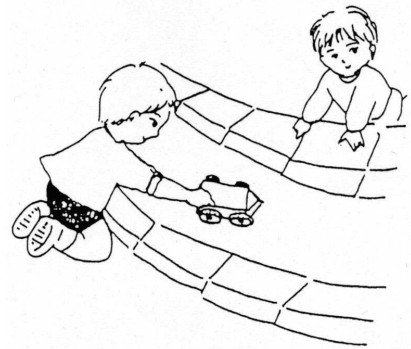
事例 ②

◎友達との偶然の出会いからアイデアを取り入れて

～どうしたら カーブする車ができるかな～

Y男は「車をカーブさせたい」という思いから、カーブをつけてスタートさせる。車の軌道にそっと積み木を並べ、道路を作る。うまくその道路に沿ってカーブする時もあるが、道路の壁となっている積み木にぶつかってしまう事もある。

そこへ偶然、右左に大きさの異なるタイヤをつけたD男が車を走らせる。D男の車はいつも同じ様にカーブする。Y男もタイヤの大きさを変えてみる。H男やM男等もカーブする車作りに夢中になる。



考察 ②

Y男が目的をもって取り組んだことで、周囲の環境に関心を寄せてかかわることができ、結果として周囲の環境が生きたものとなった。周囲で遊んでいる友達の思いや工夫が科学する心を起こす大きな環境となっている。

ポイント

子どもたちが「偶然の出来事」や「偶然の出会い」からたくさんの驚きや不思議を感じとり、試行錯誤を通して喜びや達成感を味わっていく様子が伺えます。保育者がそのような心を受け止めて関わっていることが、子どもたちの育ちの大きな支えになっていると感じました。